

2018年8月31日 全6頁

2018年7月鉱工業生産

輸出の伸び悩みに加え西日本豪雨の影響もあり、前月比▲0.1%

経済調査部

研究員 廣野 洋太

エコノミスト 小林 俊介

[要約]

- 7月の生産指数は前月比▲0.1%と3ヶ月連続で低下し、コンセンサス（同+0.2%）も下回った。先行きを製造工業生産予測調査で見ると、2018年8月：同+5.6%、9月：同+0.5%となっている。なお、8月の先行き試算値（生産計画のバイアスを補正した最頻値）は同+1.2%であり、プラス推移となる可能性が高い。また、7月の貿易統計では、輸出は前月比でほぼ横ばいであり、内外需ともに力強さを欠いたことが生産に影響したようである。
- 業種別では、輸送機械工業（前月比▲4.2%）やはん用・生産用・業務用機械工業（同▲2.1%）、鉄鋼業（同▲5.0%）が低下した。品目別では普通乗用車、機械プレス、普通鋼鋼帯などが低下に寄与した。輸送機械工業では、西日本豪雨による生産停止の影響があった他、輸出も振るわなかったことが影響したもようである。鉄鋼業においても、西日本豪雨や台風などによって一部の工場で生産が停止していたため、この影響が出たとみられる。はん用・生産用・業務用機械は、出荷が減少したことが生産にも影響したものとみられる。
- 7月は、出荷が大きく低下（前月比▲1.9%）しており、生産を上回る下げ幅となっている。業種別に見ると、輸送機械工業（同▲7.8%）、はん用・生産用・業務用機械工業（同▲1.3%）、鉄鋼業（同▲2.1%）などで出荷が低下しており、特に輸送機械工業のマイナス寄与が大きい。豪雨による影響が大きいとみられ、出荷の減少は一定程度割り引いて見る必要があるだろう。

図表1：鉱工業生産の概況（季節調整済み前月比、%）

	2017年			2018年						
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
鉱工業生産	+0.5	+0.7	+1.8	▲4.5	+2.0	+1.4	+0.5	▲0.2	▲1.8	▲0.1
コンセンサス										+0.2
DIR予想										+0.3
出荷	▲0.4	+1.9	+2.0	▲4.5	+1.6	+1.2	+1.6	▲1.6	+0.3	▲1.9
在庫	+2.9	▲0.6	+0.0	▲0.5	+0.5	+3.3	▲0.6	+0.6	▲1.9	▲0.2
在庫率	+2.3	▲1.8	+0.4	+1.8	+0.3	+2.7	▲2.8	+0.1	+2.3	+0.4

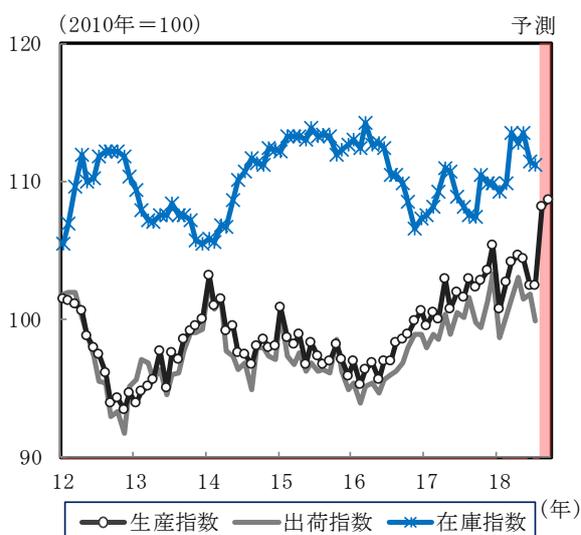
（注）コンセンサスはBloomberg。

（出所）Bloomberg、経済産業省統計より大和総研作成

7月の生産はコンセンサスを下回り微減、内外需両方の弱さが影響

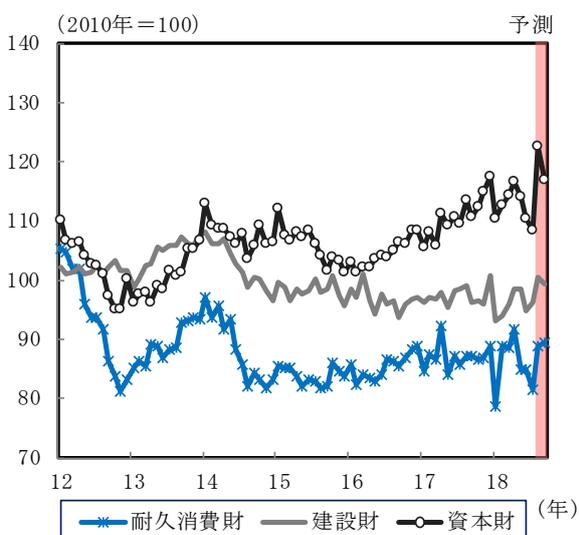
2018年7月の生産指数は前月比▲0.1%と3ヶ月連続で低下し、コンセンサス（同+0.2%）も下回った。先行きを製造工業生産予測調査で見ると、2018年8月：同+5.6%、9月：同+0.5%となっている。なお、8月の先行き試算値（生産計画のバイアスを補正した最頻値）は同+1.2%であり、プラス推移となる可能性が高い。また、7月の貿易統計では、輸出は前月比でほぼ横ばいであり、内外需ともに力強さを欠いたことが生産に影響したようである。

図表2：生産・出荷・在庫



(注) 生産指数の直近2ヶ月の値は、製造工業生産予測調査。
(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

図表3：生産指数の財別内訳



(注) 直近2ヶ月の値は、製造工業生産予測調査。
(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

輸送機械工業やはん用・生産用・業務用機械工業、鉄鋼業が生産減

業種別に見ると、輸送機械工業（前月比▲4.2%）、はん用・生産用・業務用機械工業（同▲2.1%）や鉄鋼業（同▲5.0%）などが全体を押し下げた。なお、生産指数は15業種中8業種で低下した。

品目別に見ると、輸送機械工業では、普通乗用車などが低下に寄与した。西日本豪雨による生産停止の影響があった他、輸出も振るわなかったことが影響したもようである。

はん用・生産用・業務用機械工業においては、機械プレスなどの影響が大きかった。こちらでも一部豪雨の影響があったとみられる一方、出荷が減少したことが生産にも影響したものとみられる。

鉄鋼業においては、普通鋼鋼帯などが低下に寄与した。鉄鋼業においても、西日本豪雨や設備修繕などによって一部の工場が生産が停止していたため、この影響が出たとみられる。また鉄鋼輸出は米国を中心に軟調な推移となっており、米国の関税引き上げの影響が生産にも出始めている可能性がある。

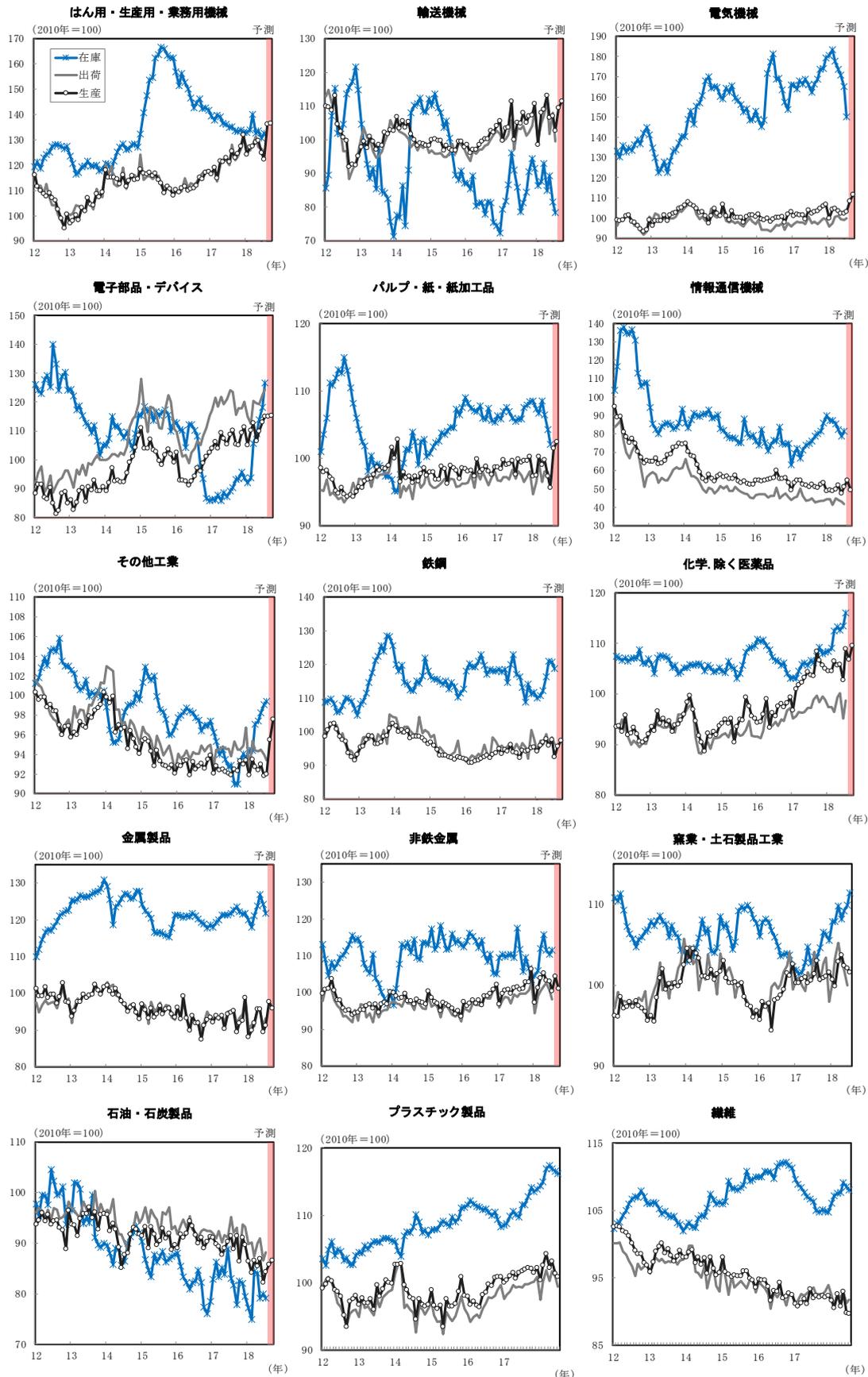
一方化学工業（前月比+5.9%）、電子部品・デバイス工業（同+1.8%）は上昇した。7月の化学製品輸出は、前月比で減少しており、国内向けの生産・出荷が増加したものとみられる。

電子部品・デバイス工業は増勢が鈍化し、ほぼ横ばい圏で推移しているものの、データセンターや IoT などの新しい需要が支えとなり、高水準を維持しているようだ。一方で、中国が政策的に推進する電子部品・デバイスの国産化は日本にとってはマイナス要因となる可能性が高い。今後も世界の半導体市場は拡大するとみられるが、日本の生産はそれほど伸びない可能性がある。

一方で、電子部品・デバイス工業の在庫の積み上がりについては注意が必要である。2017年は、スマートフォン需要などで中国向け輸出を中心に出荷が好調であり、生産を増加させてきた。しかし、足下ではその効果は一巡しており、在庫は急激に積み上がっている。

7月は、出荷が大きく低下（前月比▲1.9%）しており、生産を上回る下げ幅となっている。業種別に見ると、輸送機械工業（同▲7.8%）、はん用・生産用・業務用機械工業（同▲1.3%）、鉄鋼業（同▲2.1%）などで出荷が低下しており、特に輸送機械工業のマイナス寄与が大きい。豪雨による影響が大きいとみられ、出荷の減少は一定程度割り引いて見る必要があるだろう。

図表4：業種別、生産・出荷・在庫



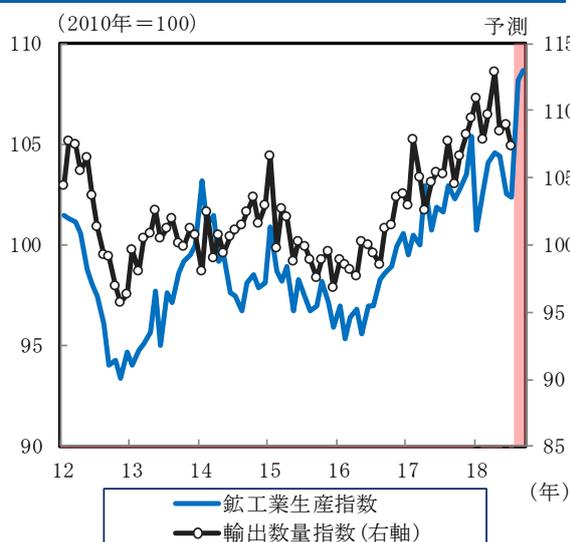
(注) 生産指数の予測値は、製造工業生産予測調査（2018年4月調査より2015年基準に変更）。
 はん用・生産用・業務用機械工業は、生産用機械工業と汎用・業務用機械工業の加重平均。
 (出所) 経済産業省統計より大和総研作成

先行きは非常に緩やかな増産を見込む

8月以降に関しては、増産基調は維持されるものの、そのペースは鈍化していくとみている。国内向けの設備投資については、2018年においては好調な企業業績と更新需要が全体を押し上げるとみている。他方外需については、米国の減税効果などによって大きく腰折れする可能性は低いものの、足下では輸出の増加ペースが鈍化してきている。

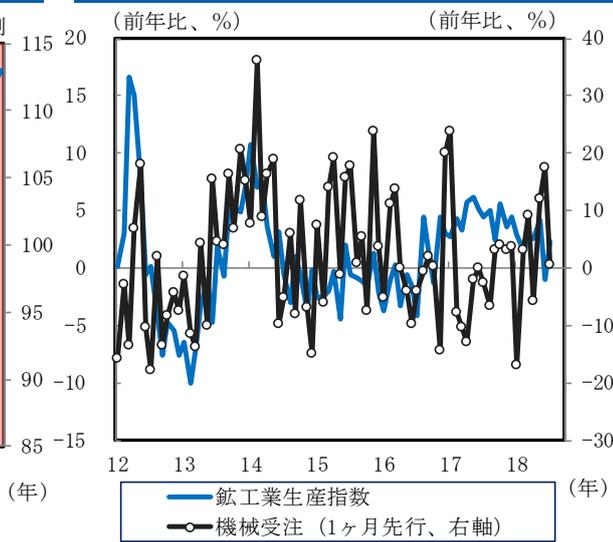
ただし、外需には下振れリスクがある。足下では米国が保護主義的政策を押し進める一方、各国も対抗措置を取り始めており、世界貿易の停滞には注意が必要である。特に、日本経済に直接的な影響があるのは米国の自動車関税引き上げとみられる。米国が自動車とその部品に20%の関税をかけた場合、日本企業の負担は1.7兆円以上増加する可能性があり¹、大きな影響が予想される。

図表5：鉱工業生産と輸出数量



(注) 鉱工業生産の直近2ヶ月の値は、製造工業生産予測調査。
(出所) 経済産業省、内閣府統計より大和総研作成

図表6：機械受注と生産



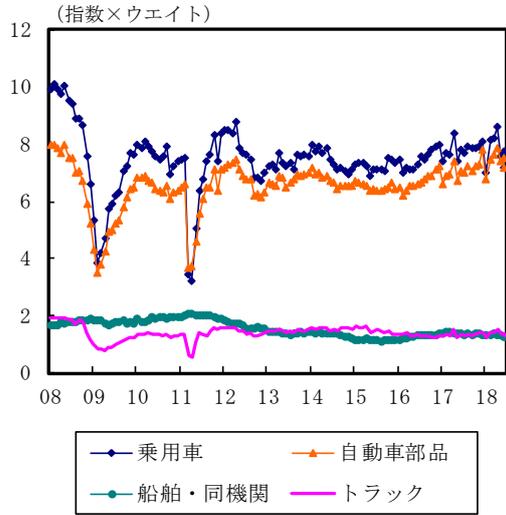
(注) 機械受注は、民需(船舶を除く)。
(出所) 経済産業省、内閣府統計より大和総研作成

¹ 詳細は、小林俊介、廣野洋太「日本経済見通し：2018年8月」(大和総研レポート、2018年8月17日)を参照。

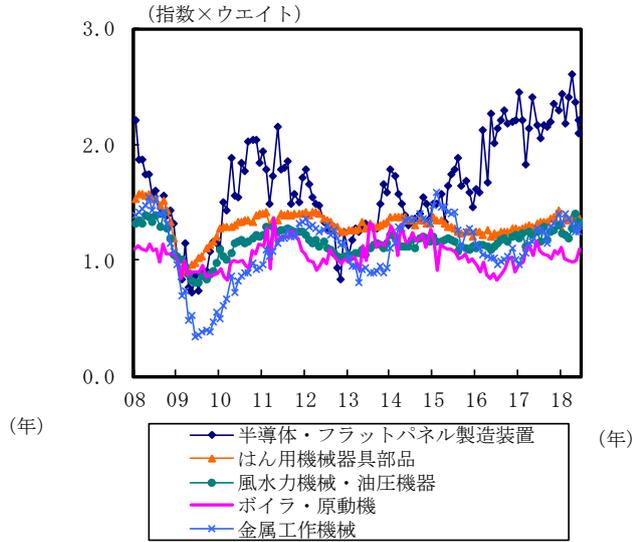
https://www.dir.co.jp/report/research/economics/outlook/20180817_020263.html

主要産業の生産動向(季節調整値)

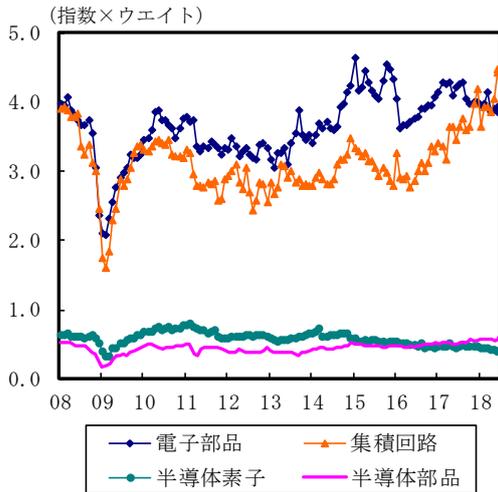
輸送機械



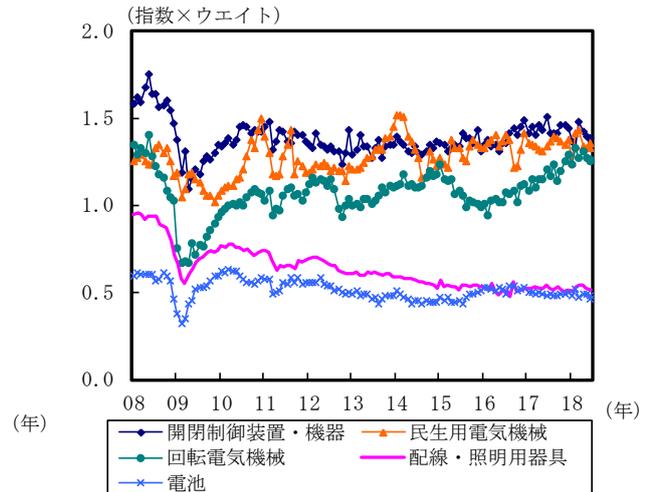
はん用・生産用・業務用機械



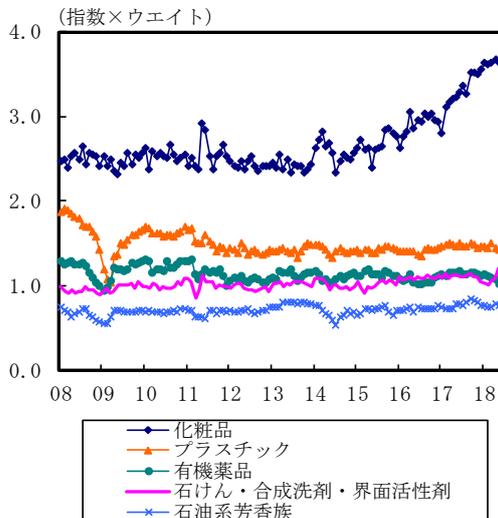
電子部品・デバイス



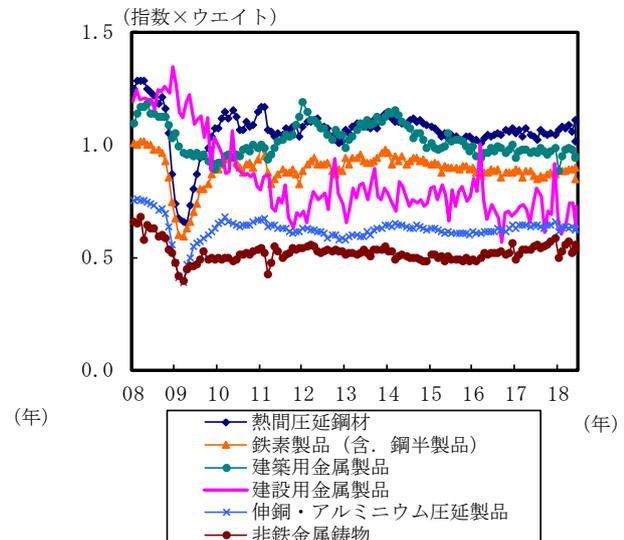
電気機械



化学



鉄鋼・非鉄金属・金属製品



(出所) 経済産業省統計より大和総研作成